

派 遣 報 告 書 (報 告 者 : 中 屋 敷 大)

大会名	第 79 回全九州高等学校バスケットボール競技大会
開催地	佐賀県
日 時	令和 8 年 6 月 20 日 (土) ~ 21 日 (日)
担当ゲーム 1	(男子) 川内 (鹿児島①) vs 佐賀東 (佐賀②)
相手審判	CC : 藤田 則正 (長崎) U1 : 中屋敷 大 (大分) U2 : 中村 光希 (熊本)
(担当ゲーム 1) Pre-Game Conference	
<ul style="list-style-type: none"> ・ チーム情報の確認 (パンフレットや他県からの情報をもとにした選手の特徴の把握) ・ 両チームとも留学生がいないので、ドライブが起きた時の視野の分担や、その後のキックアウトの目の当て方を確認 ・ T が最後までプレーを見てニューリードに入る (リバウンドまで見る) 	
(担当ゲーム 1) Post-Game Conference	
<ul style="list-style-type: none"> ・ アイコンタクトをとりながらトラブルなくゲームを終えることができた ・ ショットに対するところで手のアピールがあったものの、コミュニケーションを取ることで、納得してもらえた。しかし 3 秒のアピールに関しては、クルーとして序盤に笛を入れるべきであった。 ・ トリプルコールが数回あり、ボール中心になっている時間があった。 ・ 点差が開く展開となったが、最後まで一貫して笛を鳴らし続けることができた。 	

担当ゲーム 2	(男子) 福岡第一 (福岡②) vs 延岡学園 (宮崎①)
相手審判	CC : 中屋敷 大 (大分) U1 : 佐藤 凜明 (佐賀) U2 : 立石 龍吾 (佐賀)
(担当ゲーム 1) Pre-Game Conference	
<ul style="list-style-type: none"> ・ チーム情報の確認 (前の試合を見てのチームや選手の特徴の確認) ・ 両チーム DF の強度が高いので、明らかなものを積み重ねていく (コフィンコーナーの対応など) ・ チームの意図を汲み取り、速攻の場面で軽い笛を無くしていきたい ・ 外国籍同士のマッチアップや、そこに対してのダブルチームの目の当て方の確認 ・ インターフェアのルールの確認 	
(担当ゲーム 1) Post-Game Conference	
<ul style="list-style-type: none"> ・ 序盤から明らかなものを積み重ねることができた。 ・ 00B の判定でベンチからのアピールに対しての説明が高圧的に見える場面があった。ベンチが何を求めているのか、受け入れる気持ちが足りなかった。 ・ 全てを把握しようとするがあまり、介入しすぎる場面が多かった。3PO をより強くするために、わからないものは誰かが見えており、クルーに委ねるメンタルも必要だと思った。 	

担当ゲーム3	(男子) 福大大濠 (福岡①) vs 沖縄水産 (沖縄②)
相手審判	CC: 中屋敷 大 (大分) U1: 林 剛太 (熊本) U2: 岡井 元毅 (佐賀)
(担当ゲーム1) Pre-Game Conference	
<ul style="list-style-type: none"> ・チーム情報の確認 (キープレイヤーの確認) ・両チームキープレイヤーがいるので、ボールサイド2を作り手厚く見られる状態にする ・アイコンタクトを取りながらクルーで協力、処置ミスゼロへ繋げる 	
(担当ゲーム1) Post-Game Conference	
<ul style="list-style-type: none"> ・お互いクリーンなゲーム展開でナチュラルインターバルを作ることができた。笛の数は試合を通して少なく、タフなゲームにもっていくことができた。 ・とりこぼしたものは少ないが、強いて言えば序盤にいくつかテンポセットとして笛を入れても良い場面があった。序盤だからこそ伝わる笛を入れる。 ・タイマーの部分において、プライマリーレフェリーが正しく訂正するなど処置ミスゼロへつなげることができた。 	

今大会に参加しての感想など
<p>本大会は、高校生活の集大成として挑むチーム、インターハイ出場を控えたチーム、また惜しくも全国出場を逃し次の一歩へとチャレンジするチームなど、それぞれの異なる背景や多様な目的を持った選手たちが一堂に会する重要な大会でありました。そのような緊張感のある舞台上、多くのゲームでCCを務めさせていただきました。今回の大会を通じて、私自身が強く感じた課題が2つあります。1つ目はCC(クルーチーフ)として求められる役割と介入のバランスです。「ゲームを全て掌握しなければならない」「クルーを守らなければならない」という責任感が強く働きすぎた結果、あらゆる局面において過度に介入しようとしてしまい、かえって空回りしてしまう場面がありました。今後は、自分が見えていないエリアや場面は「クルーが見てくれている」という信頼のもとに判定を委ねる強さ、そしてパートナーを尊重し、不要なホイッスルを控える心の余裕が必要であると痛感いたしました。2つ目はコミュニケーションにおける「温度感」の察知です。ベンチ(コーチ陣)からのアピールやコミュニケーションの際、相手の感情が高ぶっている(ホットな)状態に対し、こちらも強く、威圧的とも捉えられかねない態度で応じてしまうことがありました。これは不要な火種を生み、信頼関係を損ね、結果として自らの判定に対する説得力を欠く原因になりかねないと感じました。相手の「温度」を冷静に察知し、受け止める柔軟性が必要であると学びました。今後は、クルーとの間に強固な信頼関係を築けるCCを目指します。そのために、ゲームの状況を正しく把握する「気づき」の力と、引くべきところは引き、出るべきところは出るという「決断」の力をより一層磨いてまいります。</p> <p>今回派遣してくださった大分県バスケットボール協会の皆様、審判委員会の方々へ深く感謝し報告とさせていただきます</p>